ミュージアム・アイズ

MUSEUM EYES

Vol.53
2009

MEIJI UNIVERSITY MUSEUM

出展品『延岡城下図屏風』（個人蔵）写真提供　延岡市教育委員会

特集

2009年度明治大学博物館秋季特別展

大名と領地 お殿様のお引っ越し

●博物館ニュース　福田康夫元首相来館
●展示&リサーチ　企画展「見いだされた日本 Le Japon vécu」
●市民レクチャー　杉原荘介先生と市川市の遺跡（下）
●学芸研究室から　大名と領地～譜代大名内藤家の転封～（下）
●収蔵室からスペシャル　商品部門：樹木の皮で作られた織物 - アツシ織テーブルセンター
刑事部門：名所　御茶ノ水案内／鹿児島湾台場絵図・薩英戦争経過図
考古部門：ペルーの土器～チャンカイ文化～
●入館者数の動き・団体見学の記録・図書室から
●博物館友の会から　特別展ボランティア体験記

明治大学博物館

明治大学博物館 2009 年度秋季特別展

お殿様のお引っ越し

大名と領地

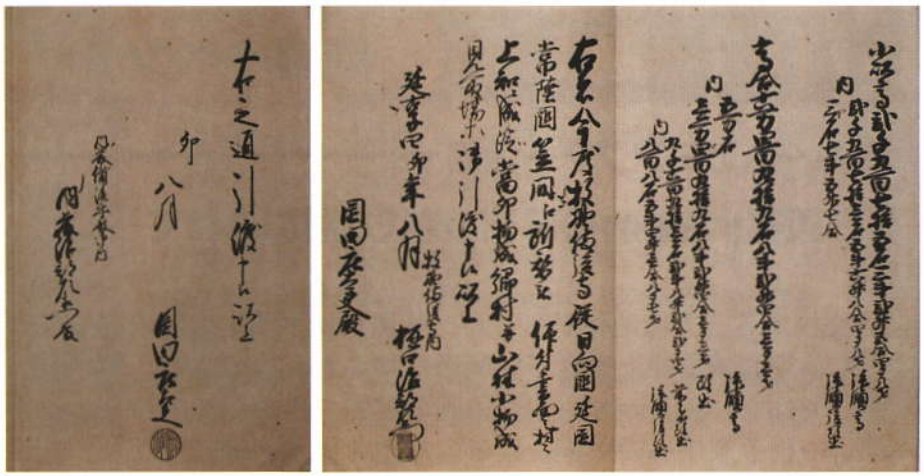
江戸時代のお殿様は何代にもわたってその土地を支配し、土地の人々とも深く結びついている…。そんなイメージがあるかも知れませんが、大名は将軍の命令により領地を離れなければならない事がありました。領地を召し上げられる改易、新たな領地への移動を命じられる転封など、その契機は一つではありません。さらに、転封も外様大名の牽制を目的としたものから、幕閣としての出世に伴い譜代大名の領地が転ぜられるものなど、様々でした。

延享 4 (1747)年、陸奥国磐城平を治めていた内藤家が日向国延岡へ、延岡を治めていた牧野家が常陸国笠間へ、笠間を治めていた井上家が磐城平へと領地を移される三方領地替えが行われました。

転封の際、家臣達の移動はどの様に行われたのでしょうか？ お城の荷物は？ 旧領地の人々とどの様なやり取りがおこなわれ、新領地の人々とはどの様にして新たな関係が結ばれたのでしょうか。転封を巡ってたくさんの疑問がわいてきます。

他の大名家文書に転封関係史料があまり残っていないなかで、明治大学博物館が所蔵する内藤家文書にはこの延享4年の転封の実態を明らかにしうる良質な史料が数多く残されています。本展では、館蔵の内藤家文書は勿論、他の大名家に伝来する関連史料などを織り交ぜて、江戸時代の大名の転封を、さらには転封を通じて大名と地域の人々との関係を描きます。貴重な古文書はもとより、内藤家が新領地とした延岡の城下を描いた壮大な「延岡城下図屏風」や、大名と地域の人々を結ぶ祭礼の道具、貴重な能面なども展示予定です。

【主　　催】 明治大学博物館
【後　　援】 延岡市教育委員会、千代田区
【会　　期】 2009 年 10 月 17 日 (土) ～ 12 月 20 日 (日) 初日は 13 時開幕
【会　　場】 明治大学博物館特別展示室
【開館時間】 10:00 ～ 17:00、会期中無休
【入 場 料】 300 円 (明治大学学生・同教職員、明治大学博物館友の会会員、リバティアカデミー会員、明大カード会員、高校生以下の児童・生徒と引率教諭、愛の手帳・身体障害者手帳所持者は無料)



「郷村高帳」（『内藤家文書』明治大学博物館蔵）

延享４年、内藤家は磐城平から延岡へ転封しました。転封の際、城の引き渡しは幕府の上使を介して、領地の引き渡しは幕府の代官を介して進められます。左写真「郷村高帳」は牧野家が延岡城邑を内藤家へ引き渡した時に発給したものです。延岡の領地は、牧野家から一旦幕府に引き渡され、その後、代官岡田庄太夫から内藤家へ引き渡されています。一番左のページのみ筆跡が異なっている事にも注目して下さい。

檜垣桐唐草蒔絵面箱
（延岡市内藤記念館蔵）

延岡城の城主は、高橋氏、有馬氏、三浦氏、牧野氏、内藤氏と交替しますが、「延岡城下図屏風」（表紙参照）は、有馬康純の時代、1670年代 ～ 1680年代はじめに描かれたとされています。右隻の上部には延岡城が、中心よりやや右側には今山八幡宮での神事能が描かれています。

今山八幡宮での神事能は、有馬氏の時代には行われている事が確認され、転封により城主が交替しても、代々の城主によって引き継がれ催されてきました。内藤家入封の際にも、前領主牧野家から神事能の道具類が引き渡されています。文様、技法から慶長年間作成とされる檜垣桐唐草蒔絵面箱には、代々の延岡城主に引き継がれてきた黒式尉（拡大図の舞台上で使用されている能面が黒式尉）、白式尉の面が収められていました。

延岡市指定有形文化財
「延岡城下図屏風」
個人蔵　拡大図

大名と領地　～お殿様のお引っ越し～　関連イベント

明治大学ホームカミングデー企画

開幕記念講演会　転封の構造―「お殿様(内藤家中)のお引っ越し」展によせて―

講師　名城大学法学部教授　谷口　昭

延享4(1747)年、3つの大名家中が城邑を交換する三方領地替があった。陸奥磐城平城主内藤政樹が日向延岡城に、延岡城主牧野貞通が常陸笠間城に、笠間城主井上正経が磐城平に移されたのである。領地替＝転封は、近世の譜代大名にとって珍しいことではない。しかし、領地移動の実態を再現してみると、家中と称された大名の存在形態はもとより、幕府や相手家中への対応、領分に対する領地の継続性など、近世社会の具体層が浮かび出てくる。これらを転封の構造という視点から捉え、幕府・家中・領民に作用した法とメカニズムを明らかにしたい。

■日　　時　10月18日(日)13:00～14:30
■会　　場　明治大学リバティタワー1011教室
■申し込み　不要

明治大学リバティアカデミー企画

博物館公開講座「日本史ゼミナール」　お殿様と地域社会

本講座では展示をより深く理解する為の関連講座として、お殿様と地域の人々は如何なる関係を取り結んでいたのかという問題を取り上げます。四人の講師が、近世はもとより、近代までを対象に、様々な角度からお殿様と地域の歴史について論じます。

◆10月24日(土)　磐城平から延岡へ―延享四年内藤家の転封
明治大学博物館学芸員　日比佳代子
◆11月　7日(土)　展示絵解「大名と領地～お殿様のお引っ越し～」
同　日比佳代子
◆11月21日(土)「暴君」と「名君」のあいだ―民間地誌に描かれた江戸時代の殿様たち―
福山大学人間文化学部准教授　引野亨輔
◆12月　5日(土)　明治の殿様と地域社会
日本福祉大学知多半島総合研究所主任研究員　内山一幸
◆12月19日(土)　近代における内藤家と延岡
明治大学文学部教授　落合弘樹

■時　　間　15:00～16:30
■申し込み　リバティアカデミー事務局　TEL 03-3296-4423
受講にはリバティアカデミーへの入会が必要です。

展示会および関連イベントの問合先

明治大学博物館事務室　〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1の1
明治大学アカデミーコモン地階　TEL.03-3296-4448

★10頁～11頁　学芸研究室から「大名と領地～譜代大名内藤家の転封～(下)」にも、関連記事が掲載されています。

「一日館長」体験イベント開催

去る2009年3月27日、小・中学生が一日博物館長になって博物館の仕事の一部を体験するイベント「大学博物館長のイスをめざせ!」を開催しました。

このイベントは、博物館の業務の一部を体験し、また博物館の職員やボランティア、利用者と交流することで、博物館の役割について理解を深めていただくことを目的としています。たくさんの応募の中から一日館長に選ばれたのは、富沢咲天さん(中学1年)、久高広大君(小学6年)、河田光陽君(小学5年)の3名です。一日館長には来館者のお出迎えや収蔵資料の点検など、博物館業務の一部を体験していただきました。

明治大学博物館では、巨大なタイム・カプセルのような博物館の仕組みをより多くの子どもたちに理解していただけるよう、今後もさまざまなイベントを開催していきたいと思います。

左から河田光陽館長、富沢咲天館長、久高広大館長

福田康夫元首相が来館

2009年6月17日(水)、企画展「見いだされた日本 Le Japon Vécu ークリスチャン・ポラックコレクションー」展(明治大学国際交流センター主催、明治大学フランス研究が中心となって開催)に、福田康夫元首相が来場されました。福田元首相はポラック氏と長年にわたる交流があり、氏の解説のもと貴重なコレクションの数々をじっくりと観覧されました。また、学芸員の案内で博物館常設展示室もご覧になったほか、講義の一環として来館していた小川ジュヌヴィエヴ教授(商学部)のゼミ生との記念撮影にも快く応じていただきました。

クリスチャン・ポラック氏(左)に解説を受ける福田康夫元首相

石井良助先生旧蔵史料を収蔵しました

本年2月から7月にかけて、日本刑事法制史の泰斗である故石井良助先生がかつて書斎に架蔵されていたという近世～近代初頭の法制関係史料37件が収蔵されました。

享保4年(1719)～8年の幕府の町触を留め書きした御触書留帳は、町触以外に、吉原関係の届書の類がいくつか書写されており、日本最大の遊里の実情を示すものとして興味深い史料です。江戸町方沽券并諸書留は家屋敷や土地の売買証文である沽券状以外にも訴訟証文や諸届・願書の写しが豊富に収録されており、農村部に較べると残存量のきわめて少ない江戸町方史料として大変稀少な存在と言えます。また、書写の対象となっている文書を作成した町は湯島・本郷・神田近辺であり、大学周辺の地域の歴史を明らかにする史料でもあります。しかし、その多くを占めるのは公事方の役人が職務遂行上の参考書として編纂した、事件への対処方法や刑罰適用の事例集で、記載された豊富な事例に加え、懐中に携帯できるような小判のものから、数冊に分冊されたものまで様々な形態を見ることができます。

石井良助先生旧蔵史料

企画展「見いだされた日本 Le Japon vécu」

前田　更子（政治経済学部専任講師）

1．企画展開催の経緯―日仏交流と明治大学―

2009年6月5日～25日、明治大学博物館特別展示室にて「見出された日本 Le Japon vécu」が開催された。主催は、明治大学国際交流センター・地域研究グループ「フランス研究」であり、後援として在日フランス大使館、(株)セリク、明大博物館、同大図書館、同大商学部の協力を得た。

本展は、日仏交流150周年を記念して、昨年来日仏両国でおこなわれてきた記念行事の一環として企画されたものである。1858年10月9日、日本とフランスのあいだで日仏修好通商条約が締結され、正式な外交関係が樹立した。以来、両国のつながりは政治や外交にとどまらず、軍事、産業、文化、教育などさまざまな領域で築かれ豊かなものとなっていく。言うまでもなく、明治大学は創立当初から、フランスと非常に深いかかわりをもつ。明治大学の創立者3名、すなわち岸本辰雄(鳥取藩士)、宮城浩蔵(天童藩士)、矢代操(鯖江藩士)は、司法省法学校の第1期生として、「御雇い外国人」のフランス人法学者ボワソナードに師事した。そののち、岸本辰雄はパリ大学へ、宮城浩蔵はリヨン大学へ、それぞれ留学しフランス法についてさらに多くを学び、帰国後の1881年に「権利自由」を建学の精神とする明治法律学校を創設したのである。

日仏交流150年の節目にあたり、明治大学でフランス語・フランス研究を担当する教員グループは、日仏関係の歴史を振り返り、創立当時の明治大学の姿の一端を学生に伝えるために今回の展示を企画し始めた。最終的に2008年中の開催はかなわなかったが、クリスチャン・ポラック氏、明治大学博物館の忽那敬三氏、同大学国際交流センターの倉田裕子氏をはじめ多方面からの協力を得て、2009年6月に企画展の実現へとこぎつけた。

2．クリスチャン・ポラック氏とそのコレクション

展示品の大半は、クリスチャン・ポラック氏の私蔵コレクションである。クリスチャン・ポラック氏((株)セリク代表取締役社長）は、一橋大学で教鞭をとり、日仏交流・外交史に関する著書・論文を多数執筆する歴史研究者であり、同時に、日仏交流史関連資料のコレクターとして高名な人物である。ポラック氏は、1971年フランス国立東洋文化研究所日本語科を卒業後、1972年に日本政府国費留学生として来日し、1980年には一橋大学大学院法学研究科において「フランスの極東政策と日仏関係：1914～1925」と題する論文を提出している。在日年数は37年におよぶ。「予算を超える金額であっても書物、絵画、写真、文献等を躊躇なく購入し、集めるように」という恩師・高橋邦太郎氏の助言にしたがい、ポラック氏が世界各地で収集した日仏交流関連資料は8万点にのぼる。つまり、今回展示された作品は、そのごく一部である。

そのほかポラック氏のコレクションは、日仏交流150周年を記念する数々の展示会で公開されている。たとえば、2009年1月にはシャネルのネクサス・ホールで「交差する眼差し―クリスチャン・ポラック コレクション―」展が開かれ、また、同年3月～5月に東京大学総合研究博物館で開催された「維新と明治―日仏学術交流の黎明―」においても、ポラック氏のコレクションが展示品の多くを占めていた。著書『絹と光―日仏交流の黄金期（日仏交流史の黎明期から戦後まで）―』(アシェット婦人画報社、2001年)、および『筆と刀―日本のなかのもうひとつのフランス(1872年～1960年)―』(在日フランス商工会議所、2005年)を参照すれば、彼のコレクションをさらに楽しむことができるだろう。

写真１『フランス郵船会社の広告ポスター』
サンディ・フック画

写真２　ちりめん本

写真３　ボアソナードと明治大学

3. 企画展の概要

さて、「見いだされた日本Le Japon vécu」展の概要を紹介したい。

本企画展のコンセプトは、「明治期の日本および日本人は、フランス人の眼にどのように映り、そしてどのように表現されてきたのか」、この問題を考えてみたいということであった。その結果、展示品の約半数が、明治期の日本に17年間滞在し、日本人・日本社会を観察し描き、そしてメッセージを発信し続けたジョルジュ・ビゴーの作品で占められることになった。これらビゴーの作品群を第1のコーナーとすれば、本企画展はそのほかに大きくわけて3つのコーナーから成り立っていた。第2コーナーとして、日本とフランスをつないだモノ、すなわち絹、船、飛行機などに関するポスターや商標。第3に、ちりめん本を中心とした欧文和装本のコーナー。そして第4に、ボワソナード関係の資料である。ほとんどの展示品の製作年は1870年代～1900年代だが、一部のポスターとちりめん本に限っては、1930～50年代の作品が含まれている。以下、コーナーごとに順にみていこう。

第1のコーナーでは、ジョルジュ・フェルディナン・ビゴーの作品を展示した。中学・高校の日本史の教科書にも載るほどだから、多くの人がビゴーの風刺画をすでに一度は眼にしたことがあっただろう。文明開化の流れの中で急速に変化する日本社会を鋭く描いた時局風刺雑誌『トバエ』や『ポタン・ド・ヨコ』、『ル・ポタン』、あるいは『1896年8月4日、調印された日仏通商条約』、『1897年の出来事』など一連の画集は、今回の展示でもビゴー作品の一角を占めた。しかしながら、それにもまして本企画展で重視したのは、ビゴーの描いた日本の風景、庶民、女性というテーマである。西欧化の波にのまれ急激な変貌を遂げているかのように見える日本にあって、ビゴーは、日本人の庶民の生活や朴訥な心のありよう、とりわけ愛くるしい日本女性のなかに、彼があこがれた浮世絵の世界を見出していた。ビゴーは、在日17年のあいだに女性や庶民をモチーフにした作品を数多く残している。今回は、ポラック氏のコレクションのなかから、千代田城(江戸城)を描いたビゴーの油彩画など日本で初めて公開される作品のほか、ビゴーの曾孫ロワゾン氏が保管する銅版をもとに新たに刷られ蘇った、ビゴーの版画(日本女性)が展示された。ポラック氏がいうように、ビゴーは日本社会と日本人に対して深い愛情を抱いていた。来館者のなかには彼の描く庶民や女性の姿から、ビゴーのそうした思いを感じ取った人も多かったようである。

第2のコーナーでは、絹、サーカス、車、船、飛行機をモチーフとしたポスター、および生糸の商標を展示した。19世紀の日本とフランスの交流の歴史を、絹というテーマを抜きにして語ることはできない。国内生産の低迷に悩むフランスは日本の開国直後から横浜に入り、日本産蚕卵・生糸のフランス向け輸出取引に尽力し、その結果、日本とフランスのあいだには新たな「絹の道」がつくられた。他方、日本初の近代製糸工場である富岡製糸場は、1873年にフランス人のポール・ブリュナの監督により創設された。本企画展では、フランス輸出向け生糸玉につけられた日本各社の商標を8点のほか、生糸の卸売り価格の推移が折れ線グラフで表された「原輸出店とリヨンの商社のカレンダー」2点を展示した。カレンダーに描かれたのは十二単を着た日本人女性である。

人や物を運び、文字通り日仏のかけはしとなった船(フランス郵船)と航空機(エール・フランス)のポスターは、とりわけ来館者の注目を集めたようである。展示品のひとつに、サンディ・フック画のフランス郵船会社のポスターがあった。鳥居と着物姿の日本人女性、そして中央にはアンドレ・ルボン号が描かれたこのポスターには、日仏交流の特別なエピソードがこめられている。1923年9月1日関東大震災の際に、アンドレ・ルボン号はたまたま横浜に停泊中であり、災禍を逃れて海に飛び込んだ1500人の日本人を救助し、さらにフランス大使館員を受け入れたのである。

第3のコーナーには、欧文和装本、すなわちテキストはフランス語で書かれ、浮世絵版画の挿絵がついた和装丁の書物を展示した。なかでも、長谷川武次郎により考案されたちりめん本は縮緬布のような質感に仕上がった和紙でつくられており、そこに描かれる日本人絵師による見事な挿絵とフランス語の物語という組み合わせから、当時の両国の交流のあり方を窺うことができる。築地居留地で出版にたずさわっていたフランス人として、ピエール・パルブトー(馬留武黨)がいる。今回は、ポラック氏から、パルブトー監修『フロリアン寓話選』の異なるバージョンを4点お借りした。ちりめん本は、当時、外国人の日本滞在の土産として非常に人気があったというが、本企画展では鑑賞していた学生たちからも「一冊ほしい」という声が多く聞かれた。

最後に、第4のコーナーとして、「明治大学とボワソナード」を設けた。ここでは、ポラック氏のコレクションのほかに、明治大学図書館所蔵のボワソナードに関する資料が展示された。周知のとおり、法学者ギュスターヴ・ボワソナードは、1873年～1895年の長きにわたり日本に滞在し、その間精力的に日本の法律編纂作業にあたったことで有名で、「日本近代法の父」と呼ばれる。明治大学図書館には、ボワソナードが晩年を過ごしたフランスのアンチーヴから、弟子の一人である杉村虎一(明治法律学校教師、外交官)に宛てて書かれた書簡63通が保管されている。本企画展では、そのなかから1通を選び、さらにその手紙に添えられていたボワソナードの名刺を公開した。

3週間の会期中の来館者総数は、2142名であった。とりわけ学生が強い関心を示し、大勢が足を運んでくれたことは特筆に価するだろう。また、商学部の学生が休日の受付を担当してくれた。記して謝意を表したい。本企画展が、明治期の日仏関係を、あるいは明治大学とフランスのつながりを再確認するきっかけとなれば、幸いである。

写真4　見いだされた日本 Le Japon vécu 内覧会風景(2009年6月4日)

写真5　ポラック氏(左)に解説を受ける伊藤信太郎外務副大臣(右・当時)

杉原荘介先生と市川市の遺跡（下）

堀越 正行（明治大学博物館研究調査員）

Ⅵ　須和田の丘

須和田の丘は、弥生時代から古墳時代を経て奈良・平安時代初期まで継続する遺跡として認知されていくのであるが、先生は縄文時代の貝塚を2か所発掘している。但し共に調査年に関する記載を欠いている。その報告は1938年4月3日(24歳)に脱稿し、5月20日発行の『考古学』第9巻第5号で発表されている。どうやら弥生時代の小貝塚という想定で取り掛かったけれども、掘ったら縄文時代の貝塚であったということらしい。西の国府台寄りの久保上貝塚は前期の黒浜式から諸磯式にかけて、東の国分谷に近い根郷留見貝塚は前期末から中期初頭にかけての貝塚というが、その標高が10m以下であることを指摘するものの、巷間に流布していたであろう10m海進説に言及していないのが惜しまれる。

いやそれ以上に、須和田遺跡は「現在は既に予定の調査を終へ、あと特定の竪穴式住居趾数個の調査を余すのみの状態にまで至り、来年度は学友達の友情により、本報告の発表の可能なる見透しまでついた」と言明した予告が、ついに実現することなく、八幡一郎・森本六爾・藤森栄一などの各氏が論文誌上で表明していた期待に応えられずに終わってしまったことの方が残念である。「過ぐるこの1年、何度か私の身辺に迫った学的危機」とは、父君の死亡により社長として家業を継ぎ、少なくとも昼間は専念することが求められたことを指すものと思われるが、この状態がまだ続いていたからなのであろうか。

写真1　現場に立つ杉原荘介先生 (1982年12月19日下総国分尼寺跡第1次調査にて)

Ⅶ　人生の転機

その後の年譜を辿ると、1939年結婚、1941年明治大学専門部文科入学、1943年卒業・応召・杉原商店解散・出征、1946年復員・文部省嘱託、1947年明治大学専門部文科兼任講師・文部省勤務、1948年明治大学専門部助教授、1949年明治大学文学部助教授(新制大学)、1953年明治大学文学部教授(39歳)となっている。まさに生活環境は大きく激変しているのであるが、出征前には新潟・群馬・東京・福岡・愛媛・愛知の遺跡を発掘しており、もはや市川・千葉などというローカルな研究者の域を脱していた。

1950年1月25日の教授会で考古学専攻講座の設置が認められたのも、登呂や岩宿遺跡の華々しい成果が大きな評価につながったものと思われるが、これ以降、いよいよ考古学研究室としての発掘調査が開始されることになる。そこで、『駿台史学』に記録された各年度の研究室のあゆみで市川市の遺跡調査の足跡を追うと、付表の通りである。

市川市は大学のあるお茶の水から至近かつ貝塚など遺跡の宝庫であるため、学生の考古学実習の場として頻繁に選定されている。調査は研究室として行うので教授や担当教官の名義で行われるが、院生が現地で指揮をとるのが常である。先生はご自分の関係する発掘現場は必ず時間を割いて来跡し、進み具合や成果を見て回り、時には自ら移植ゴテを(縦に！)握り、鋭い嗅覚で良い物を掘り出すことも多かったという。

Ⅷ　第二の故里市川

先生が地元市川市の文化財保護審議会委員に就任したのは1960年(46歳)で、翌年には文化財保護委員会文化財専門審議会専門委員(後に文化庁文化財保護審議会専門委員)にも就任し、双方とも存命の限り委員を全うしている。これによって、先生に遺跡の保護という分野の活動が加わることになった。その詳しい内容は、市川市の担当職員であった熊野正也氏が『考古学者・杉原荘介』(1984年)の中で苦労話としてまとめているので私の出る幕ではないが、先生の信念は「市川市は俺の第二の故里だ。杉原が市川にいても、遺跡の一つや二つ保存もできやしないじゃないかということを絶対人には言わせない」という熊野氏に話した言葉に表われている。もちろん個人的なメンツのみで遺跡が保護できるわけは無く、保護すべき重要性を備えた遺跡であればこそ指定されたのであるが、市川市という面積約56㎢の狭くて小さな自治体が5か所もの国指定史跡を有することになったのは、申請する市と、決定する国の委員を兼務できた先生の力が大きいといえよう。

これを指定順(1次指定年のみ)に列記すると次のとおりである。

・堀之内貝塚	1964年	26,789.85㎡
・姥山貝塚	1967年	22,772.81㎡
・下総国分寺跡	1967年	19,049.11㎡
・下総国分尼寺跡	1967年	6,615.49㎡
・曽谷貝塚	1979年	42,141.64㎡

その何れもが先生が調査に関わったことのある遺跡であり、このうち後半３遺跡については市川市教育委員会が先生に団長・副団長・顧問などとして調査指導をお願いした遺跡でもある。僧寺関係は1965・66・75・76年、尼寺関係は1967・82年、曽谷貝塚は1974・75・76・77年である。これら指定直前の発掘が、指定を確実なものとしたことはいうまでもない。先生の年譜では、遺跡発掘は1981・82年の福井県河和田遺跡が最後となっているが、現場に立ったのは、市立市川考古博物館が担当した下総国分尼寺跡第１次調査の1982年12月19日(69歳13日目)が最後かもしれない(写真1)。

府立三中で3級先輩の滝口宏氏は、早稲田大学の仲間であった平野元三郎氏と1930年から下総国分寺を調べ始めている。それは須和田を先生が調べ始めた年と同じである。国分寺跡と須和田遺跡は、平川の流れる不入斗谷を挟んで南北に対峙するが、1932年に3人は相談し、国分寺は滝口・平野氏、須和田台は先生と、テリトリーを分けて専念するようにしたという。先生が下総国分寺跡の調査の団長に決してならず、常に滝口氏を立てていたのは、単に先輩というだけでなく、この密約を忠実に履行していたからであった。

Ⅸ　曽谷貝塚の決断

1974年に始まる毎夏の曽谷貝塚の発掘は、先生(60歳)が団長、私が担当者として貝塚の限界や保存の程度を広く確認することを目的とした補助調査である。これより前、曽谷貝塚一帯は市街化区域内に残る広い畑であったため、小学校用地の候補となったのであるが、先生の曽谷貝塚に対する評価は「汚い貝塚」とする低いものであり、開発許可止む無しという腹積もりであったらしい。なるほどD地点などは盛んな貝抜きが想定されたが、貝抜きによる破壊はすべての貝塚に共通することで、何も曽谷貝塚に特有なことではない。貝層の厚い部分ほど被害を受けていると思われるが、それでも貝層の末端以下は残っていた。その結果、幾多の成果をあげることができ、見学会や新聞報道などのPRを通して住民・市当局にも貝塚の重要性が広く認識されるようになった。先生もこの動向を認識し、保存に腹を決めたのである。

史跡指定の実現には、市・県・国の担当それぞれの実務の苦労が山のようにあったことは容易に想像できる。私も曽谷貝塚の指定に先立ち、1978年に周知パンフレットの作成、特別展の開催、地権者への説明会、指定同意を得る業務に加わったが、家屋19軒を含む地権者69名の同意が県教委も驚くほど短期間で得られたのは、地権者の皆さんが曽谷貝塚の重要性を理解し、すでに私権が制限される覚悟を決めていたからであった。

Ⅹ　市史と博物館

1965年に始まる市川市史の編纂は、市制30周年記念事業として市議会の審議会が市長に答申して実行に移された事業である。すぐに市は先生(51歳)に相談し、編纂の基本方針や委員の人選などを話し合い、編纂委員会を立ち上げている。副委員長として一見控え目なスタンスをとりながら、実は大きな影響力を発揮していたことは容易に想像できる。

明治大学がかかわった市川市の遺跡調査

年	月	遺跡記号	遺跡名	調査担当	種別
1951	11	Y20/K6	須和田遺跡	大塚初重	緊急対応
1954	5	P6	丸山遺跡	杉原荘介	緊急対応
〃	10	J89	堀之内貝塚	後藤守一	学術協力
1959	5	J35	曽谷貝塚	杉原荘介	実習
1961	5	J90	鳴神山遺跡	杉原荘介	実習
1962	5	J91	姥山貝塚	戸沢充則	実習
〃	9		東割遺跡	杉原荘介	確認
〃	10	J94	庚塚貝塚	杉原荘介	実習
〃	10-11	J35	曽谷貝塚	杉原荘介	緊急対応
1963	5	J89	堀之内貝塚	杉原荘介	学術
1965	5		法皇塚古墳	大塚初重	測量実習
1966	7		下総国分僧寺	杉原荘介	市教委協力
〃	8-9	J106	美濃輪台貝塚	杉原荘介	市史協力
〃	11-12	J107	北台貝塚	杉原荘介	市史・実習
1967	6-7	J108	向台貝塚	杉原荘介	市史・実習
〃	7-8		下総国分尼寺	杉原荘介	市教委協力
〃	7	J109/K33	権現原貝塚	杉原荘介	緊急対応
〃	10-3	Y20/K6	須和田遺跡	杉原荘介	市史協力
1968	5-3	Y20/K6	須和田遺跡	杉原荘介	市史協力
〃	10	P32	今島田貝塚	杉原荘介	市教委協力
1969	3-4		法皇塚古墳	小林三郎	市史協力

市川市史がすごいのは、記述の資料不足を補うため、5遺跡の発掘調査を実施したことである。先生の意見によることは明らかであるが、表中の市史とあるのがそれで、須和田遺跡などは2年近い長期にわたる発掘が実施されたのである。これほどの調査は空前絶後と思われ、市は遺跡の発掘に多額の予算を投入したに違いなく、市議会発議の事業ならではの快挙である。私の学生時代はその真っ只中であるが、国分寺に近い宿舎は、食費に困った学生の駆け込み宿の機能を果たしていた。

第1巻は1971年に刊行されたが、先生は市史で得られた発掘資料の保管だけでなく、展示活用の場として博物館の設置を構想していた。1968年の千葉県博物館構想案の発表を受け、翌年、市川市は県立博物館を誘致する陳情を行った。紆余曲折を経て1972年11月、ついに市立市川博物館(現市立市川考古博物館)が開館する(58歳)。先生にお願いした講演会は２回のみであるが、1973年１月28日(59歳)実施の開館記念講演会「市川のあけぼの」(写真2)は、狭い集会室が100名を超す聴講者で溢れた。

市川市の史跡指定は、現状ではすべて先生がやり終え、後は将来の下総国府の中枢部の発見しか無いと思える。「それは俺にはどうしようもないなあ」という先生の言葉が聞こえてきそうである。

写真２　開館記念講演会「市川のあけぼの」(1973年１月28日　旧市立市川博物館にて)

学芸研究室から

大名と領地
～譜代大名内藤家の転封～（下）

日比　佳代子（刑事部門担当学芸員）

六月五日、幕府上使立合のもとで行われる磐城平城・延岡城の受取渡しが、八月七日に決定した事が通達された。磐城平の引き渡し担当者は他の家臣が磐城平を発った後も同地に残り、引き渡しに備え、延岡城受け取りの担当者は、他の家臣に先立って延岡へ向かい、受け取りに備えることになる。

ここで、延岡城及び郷村の受け取りの様子を見てみよう。受け取りの担当役人は家老内藤治部左衛門以下二二名、受け取りの際に整えられた武器と人員は、籏竿三本、籏箱一棹、鉄砲二〇挺、玉箱一荷、弓一〇張、矢箱一荷、長柄鑓二〇本、幕箱一棹、従者として給人以下が四五人、侍分・小役人が五五人、足軽一一〇人、長柄の者・中間が一二〇人という大所帯であった。実務レベルで延岡受け取りを取り仕切ったのは、御城請取方を命じられた留守居代和田平兵衛で、彼は内藤治部左衛門らの延岡入りに先行して、六月一八日に江戸を発ち、大坂の加藤勘兵衛と打合せを行ってから、七月一八日に延岡入りしている。延岡入りした和田平兵衛は、町年寄渡部源太郎・鈴木長右衛門、町別当や近郷の大庄屋・小庄屋達の手厚い出迎えを受けている。また、延岡での下準備と受け取り役人の宿の手配を担当する増田稲右衛門や、上使や代官などへの接待を行う料理人岡嶋定八らの延岡入りも同日の事であった。岡嶋は江戸から遣わされた者で、途中大坂で饗応の為の諸道具を調達して延岡入りしている。

延岡入りした和田平兵衛は、まずは町年寄を通じて牧野家へ挨拶を入れ、面会の調整を始めている。増田稲右衛門もまた、内藤家臣の宿泊場所として町宅を確保するため、町年寄に旅籠代の見積もりなど出させている。この後も大量の荷物の一時預かり、接待の為の料理場所の確保、牧野家側との参会場所の提供等、様々な形で町方の協力を受けている。また、城引渡前は他所

2009年度秋季特別展「大名と領地―お殿様のお引っ越し―」展出展品　『延岡城下図屏風』（個人蔵）　写真提供　延岡市教育委員会

者である内藤家中の者は門内に入る事が出来ないため、内藤家からは使者を送る事も出来ず、牧野家とのやりとりも町方の人間を介して行わなければならなかった。実務レベルにおいて、転封をめぐる手続きは武士だけでは完結しえないものだったのである。内藤家臣達が暫時延岡入りしてくると、彼らの宿には「内藤備後守内　何之誰」と記した宿札が、組頭以上の家臣の宿には幕が張られた。家臣の旅宿がある町では、火事羽織を着用した足軽が、日中は鳶口を所持して、夜にはさらに紋付きの箱提灯を携帯して巡回を行う。来るべき城の引き渡しと受け取りを目前に、延岡城下の人々もまた転封という特殊な空間を共有して行くのである。

八月二日、主に郷村の受け渡しと引き取りを監督する幕府代官岡田庄太夫が延岡へ到着、翌日には、内藤家側の総責任者となる内藤治部左衛門が延岡入りした。五日には、岡田庄太夫の元で延岡統治の基本となる台帳類の内渡しが行われている。台帳類の引き渡しは膨大な数になる為、正式な引き継ぎの前に、内渡しの段階で台帳類を引き継いでおくのである。

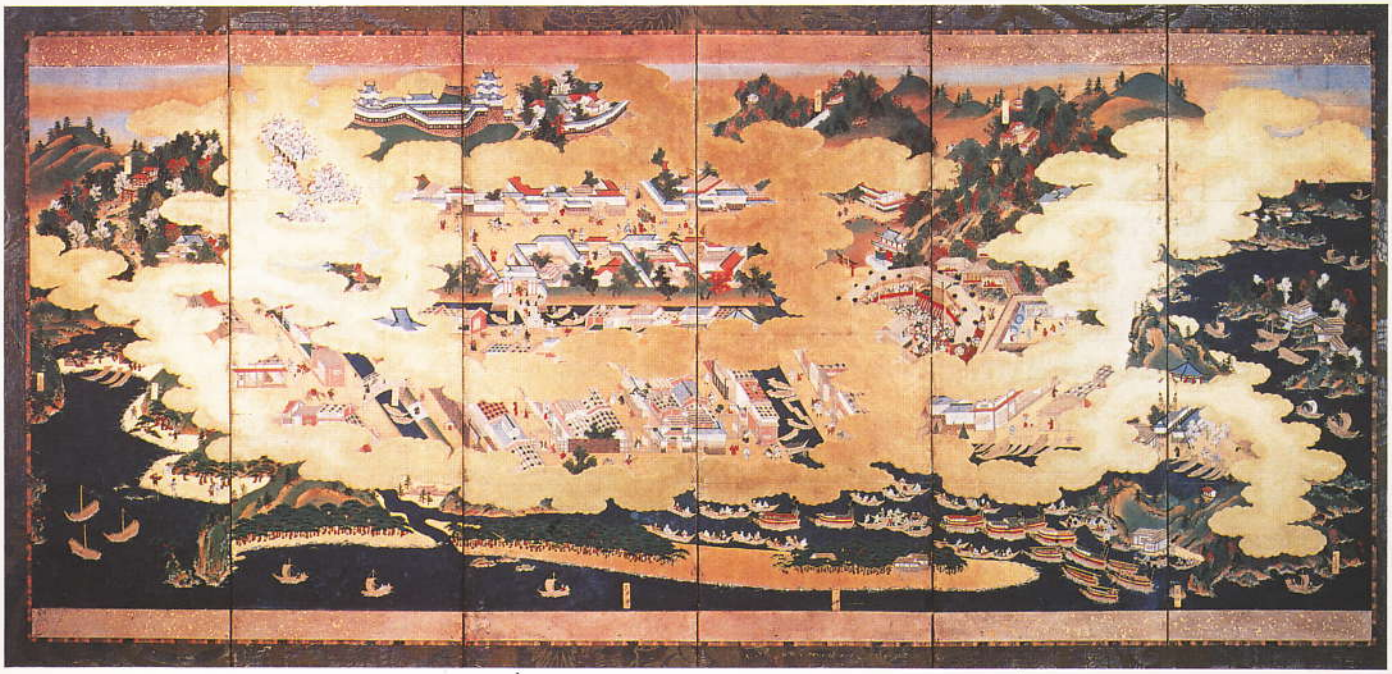
幕府上使牧野織部・松平藤九郎は当初予定より遅れて一〇日に到着、翌日の内見分後には、台帳類の引き継ぎも行われた。一二日の城引き渡しと受け取りは、西の曲輪、広間、溜の間、京口門、本丸、西の曲輪坂下門、野田口門、日向口門、土橋門、茶屋屋敷、豊後口門などで行われた。西の曲輪鉄砲の間では内藤治部左衛門らと牧野家家老、上使牧野織部が参会し、城受け取りの挨拶が行われ、延岡城に附属する武器類は目録をもって内藤治部左衛門へ引き渡されて延岡城受け渡しは終了した。これに続いて幕領にあたる宮崎領についても受取渡しが行われ、内藤家は無事新領地を引き継いだ。

一方の磐城平城では、予定通り八月七日に井上氏への引き渡しが行われ、一〇月に引き渡しを担当した内藤家臣達も延岡へ到着した。ここに、長かった内藤家のお引っ越しが終了したのである。

「演説覚書」(内藤家文書 1-20-321)

延岡領が牧野家から内藤家へ引き渡された際、膨大な数の行政資料が引き渡された。その内容は、税制、人口、宗教など多岐に渡る。この様な統治情報の引き渡しが、内藤家が新領地を統治する事を可能にしたのである。

写真は、引き継ぎ資料の一つ「演説覚書」。延岡領統治の上で必要となる種々の事柄が書き上げられている。延享4年に内藤家が入封した領地には一部旧幕府領が含まれていた為、牧野家からのものと、幕府代官岡田からのもの、2種が現存している。



収蔵室から スペシャル

樹木の皮で作られた織物

アツシ織テーブルセンター

身のまわりにある織物の糸の素材は何から作られているか気になったことはないでしょうか？

現在、お店で売られている布素材にはさまざまな種類があります。衣服の素材を見てみると、人工的に作られた化学繊維が多く、技術も進んでとても使いやすいものとなっています。その他にも木綿が使われ、また、夏になると麻の素材が使われた布地製品が売られるようになります。蚕の糸でできた絹は、高級織物として使用されています。これらの布、すなわち織物を作るには糸作りから始まることは言うまでもありませんが、糸を作る材料に樹木の皮を使う織物があることはあまり知られてはいないと思います。そこで今回はそんな珍しい織物を紹介します。

東北地方の一部や北海道で、シナノキ、オヒョウ、ハルニレなどという樹木の皮から織物を作る生活がごく最近までありました。

現在では工芸品として「しな布」の製品が販売されています。伝統的工芸品として経済産業大臣に指定されているものには「羽越しな布」があります。シナノキの皮から織られた布は「しな布」と言っています。かつての生活道具として、豆腐漉しや赤飯などを作るときに敷く蒸し布、また漁撈用の網にも使用していました。一部では東北地方の山間部に居住する狩人であるマタギの衣服にもなっていたという伝承があります。私が岩手県川井村において大正3年(1914)生まれの婦人に聞いた話ですが、その人のおばあさんがシナノキの皮の糸を材料に機織をしていたそうです。地元の博物館にはその布で作った袋が残っています。しな布生産は7月頃、山に入り、樹幹の直径20cmほどのシナノキの皮を剥ぎ、木灰で煮て、糠に漬けた後、糸になるくらいの細さに裂きます。そして糸車という道具を使って、糸の強度を出すためにひねりを加えます。糸ができたら、それを機織りの器械にかけ、さらに長い時間をかけて布を織り上げていきます。しな布はその後、バッグや帽子へと加工されます。

オヒョウやハルニレの樹木の皮から採った糸で「アツシ織」という織物ができます。アツシ織の布は衣服として北海道地方で広く利用されていました。現在ではアツシ織を伝統的工芸品として生産しています。アツシ織生産は森で剥いできた皮を木灰が入った大きな釜の熱湯に入れ、さらに一昼夜の間煮ます。その後、水できれいに洗い、細く裂いて糸を作るのです。作り方はしな布の糸を作る方法と似ています。普通、織物の糸はひねることによって糸の強度を高めますが、このアツシ織の糸はひねらないものも多く、平たい糸でそのまま織り上げてあります(写真1)。当館にはこのアツシ織でできたテーブルセンターが3点所蔵されています。1点目(写真2)はアイヌの文化と思われる模様が刺繍されたもので、本来は邪悪なものから身体などを守る魔除けとして使われ、アツシ織でできた衣服に多く見られます。このテーブルセンターを食卓で使用したとしたら、すばらしいインテリア品となるばかりでなく、邪悪なものからも家を守ってくれる品物になるかもしれません。2点目は緑や橙、紫色の縞が入ったテーブルセンター(写真3)で、3点目は無地のものです(写真4)。アツシ織やしな織でできた布生地の色は、染めてあるわけでもないのに、温か味のある素朴な薄茶色に仕上がります。

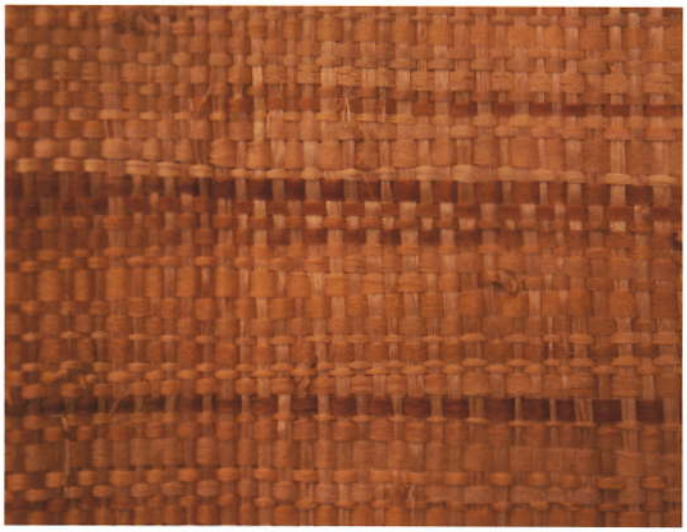


写真1　アツシ織(写真4の拡大写真)

また、寒い地域だけでなく、関東やその他の地域でも樹木の皮の織物は作られていました。5月頃になると薄紫色に花開く藤の花。よく、公園の藤棚で見られますが、あの藤蔓の樹皮から糸が採れ、織物に利用していたことを御存じでしたか？ 決して、古代のことではなく、昭和の終わり頃まで、広く本州の各地で織られていました。例えば、東京に近い多摩川の源流域にある山梨県丹波山村に行けば郷土博物館に藤布が残っていますし、藤布を最近まで織っていたことを知っている人が数多くいます。現在、藤布の生産が行われている場所の一つに丹後半島にある京都府宮津市があります。

高度成長期前後から、緊急民俗調査が日本の各地で行われましたが、おそらく、調査対象から漏れてしまった伝統や技術が数多くあることでしょう。樹木の皮を材料とした織物などは、あまり積極的に記録されたとは言いがたく、それぞれの土地で織物をどのように作ってどのように使用していたのかを深く追究することはありませんでした。昭和の終わり頃まで、当たり前のように作られていた樹木の織物。今から考えれば、想像もできないことかもしれませんが、身近にある森の中、あるいは山の中から布地の材料を得てきたということを、現在の私たちがもっと詳しく知ってもいいのではないかと思います。

(米村 創)

写真2　アツシ織　テーブルセンター(刺繍品)

写真3　アツシ織　テーブルセンター(縞入り)

写真4　アツシ織　テーブルセンター(無地)

名所 御茶ノ水案内

「神田昌平橋模様換掛替目鏡橋要路光景之眞圖」

一陽斎豊国（四代豊国）大判錦絵3枚続　明治6年頃（収蔵品番号　錦絵－729）

明治大学博物館刑事部門は刑事博物館時代から数えて、今年で開館80周年を迎えます。あまり知られていませんが、刑事部門では御茶ノ水や駿河台周辺を描いた数点の錦絵も収蔵しています。この地域は、昔から名所として知られ、錦絵にもたびたび描かれてきました。今回はそんな名所御茶ノ水付近を描いた作品をご紹介します。「神田昌平橋模様換掛替眼鏡橋要路光景之眞圖」は、神田川にかかる橋を上流に向って見たところを描いています。

3枚続きの横長画面に、2つのアーチが特徴的なメガネのような形の石造りの橋。橋上には大勢の人がくりだし、両岸の通りも人々で賑います。洋と和が混在した人々の装いは、当時の急激な変化を物語っています。遠景には、神田明神や湯島聖堂など付近の名所が屋根を見せ、左のひときわ大きな洋風建築は、現在のニコライ堂の前身、東京十字架聖堂のようです。橋の奥には、御茶ノ水と駿河台が、間からは夕焼けに映える富士山が見えます。絵の中で気になるのは、橋の上の人だかり。人々はこぞって何かを見物に来たようです。もともと名所の多い場所ですが、人々は“橋”に集まっています。

橋の上にひしめく人々が見物にやってきたのは、東京の新名所、明治6年に建造された「萬世橋（よろずよばし）」、後に音読みで「まんせいばし」と呼ばれる、現在の万世橋にあたるものです。現在よりやや上流にかかるこの橋は、前年取り壊された筋違見附の石材を再利用して作られた、日本で最初の石橋といわれています。珍しさゆえに多くの人を集めた万世橋は、2連のアーチ型から「眼鏡橋」とも言われ、文明開化の象徴として鉄道や洋風建築と並んでたびたび錦絵に登場しました。

この作品が制作された明治6年ごろ、御茶ノ水界隈の風景は大きく変化します。下記は当時の新聞から関係する記事を抜き出したものです。新しい橋の建造、洪水、教会の建築など、様々な出来事があったことがわかります。

◆明治6年6月27日　「石垣をくずして石橋の万代橋に」－万世橋の建造（東京日日新聞）

◆明治6年9月24日　「神田川氾濫、東京市中に濁流」－洪水で昌平橋等流失（東京日日新聞）

◆明治6年11月2日　「神田川に眼鏡橋」－よろずよ橋開通（東京日日新聞）

◆明治7年12月10日　「駿河台に壮麗な教会」－東京十字架聖堂（現ニコライ堂）の竣工（新聞雑誌）

（『明治ニュース事典』1983年より）

江戸時代後期に登場した錦絵の風景画は、北斎や広重などの人気絵師の存在もあり、一気に中心的な画題となり、多くの名所を描き出しました。美麗な絵画であるとともに時事速報性の強いメディアであった錦絵は、明治に入っても庶民の大切な情報源の一つでした。新都市東京の名所を描き出すことも、やはり錦絵の役割でした。次第にその役割は写真に奪われていきますが、この作品は錦絵が実用的なメディアとして輝きを放っていた頃をいまに伝えています。

（松浦　千栄子）

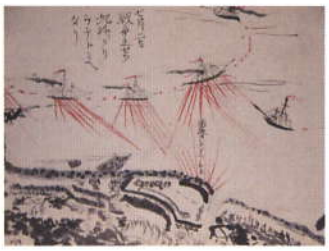
鹿児島湾台場絵図　薩英戦争経過図

日向国砂土原藩文書（目録40号冊248）

館蔵の藩政史料としては延岡藩内藤家文書の4万5千点が目立ちますが、それ以外にもいくつかの藩政史料が収蔵されており、薩摩藩の支藩であった砂土原藩島津家文書129点もその一つです。同文書の中に、鹿児島城下の様子を描いた保存状態の悪い絵図がありましたが、この程、詳細を調べて裏打ちと接合の修復をおこないました。

彩色された絵図には鹿児島湾一帯および対岸の桜島にいくつも台場（砲台）が設けられ、沿岸には石垣がめぐらされていた様子が描かれています。その防備網の中に生麦事件の事後処理要求を掲げて英艦7隻が侵入してきたのが文久3年(1863) 6月27日のことでした。もう1枚の絵図には、以降、7月3日までの英艦の動きが示され、艦砲および台場からの反撃の様子と焼失した城下の範囲が朱筆で示されています。

（外山　徹）



ペルーの土器 ～チャンカイ文化～

明治大学博物館には、明治大学考古学研究室が過去に日本各地で発掘調査を行い収集した資料のほかに、購入や寄贈による資料も多数収蔵されています。これらは日本国内のみならず海外の資料も多数含まれています。今回紹介する資料もその 1つで、南米ペルーのチャンカイ谷を中心として収集された資料です。残念ながら採集された遺跡や詳細な地点は不明ですが、寄贈された資料の特徴から大半の資料は 11世紀～ 15世紀初頭にペルーの中部海岸地域を中心として栄えていたチャンカイ文化に属する資料であることが確認されています。また、この資料は完形品を含む優品が多いため今回その一部を紹介します。

ペルーは南アメリカ大陸を南北に走るアンデス山脈の西北部に位置しています。資料が採集された地域は首都リマ市から北へ約60km行ったチャンカイ谷周辺で、そこにはチャンカイ川流域の中部海岸を中心としてワウラ川流域を北限に南はルリン川流域まで広がっていたチャンカイ文化が栄えていました (図 1)。

チャンカイ文化の土器は一般的に砂を多く含む粗い粘土を使って製作します。また、その後に表面を研磨することがないため器肌がザラザラした触感を持つのが特徴です。その成形手法は鉢などの器は概ね手捏ねで形を作り篦削りで整形が行われます。また、壺や甕は木枠に粘土をつめ、各部位を別々のパーツとして形を作った後に組み合わせます。器の種類は壺をはじめとして、甕、鉢、皿、碗などがあります。彩色の方法は粒子の細い粘土を水に溶かした「スリップ」と呼ばれる化粧土をかけた後に黒や赤、白の顔料で土器の表面に文様を描く手法をとります。

当館の収蔵資料にも壺、甕、皿、碗などの種類があります (写真 1)。その製作手法は、鉢や皿など比較的小形のものは手捏ねで形を作り、内側を横方向からのナデによる整形が行われています。また、これらの土器は口縁部が楕円形に歪んでいるものや底部が平坦ではない資料が見られることから土器製作にはろくろによる成形は行われていなかったと思われます。一方、壺や甕などは型が使われ胴体の前後部分、頸部、把手を別々のパーツとして製作し、胴体部→頸部→把手の順に組み合わせるという方法がとられています。

土器の彩色の方法は白色スリップをかけた後に文様を描くものと、赤色スリップをかけた後に文様を描くものがあります。前者はチャンカイ文化の彩色表現の特徴として多く見られ、白色スリップを土器の表面にかけた後、その上に黒色の顔料で文様を描く白地黒彩ともいうべき手法です。館収蔵資料には黒色顔料で口縁部を回るように階段状の文様が描かれているものなどがあります (写真 2 右)。後者には赤、白、黒の顔料が使われ幾何学文様が描かれています (写真 1)。また、土器に粘土造形を施した資料もあります。これは赤色スリップ、白色スリップの下地にそれぞれ見られます。一つはチャンカイ文化の特徴とも言うべき造形で、壺形土器に粘土で人面を付けたもので、頸部に粘土で横長な目と突出した鼻で鉢巻状のものを巻いた人面が表現されているものや、甕形土器の頸部に粘土で目と耳が貼付された後に口から耳にかけて黒色顔料で髭と思われる彩色がなされているユーモラスな顔が表現されています (写真 1後右、写真 3)。なかでも、鉢巻をしている人物は壺の胴体部に手や衣服が表現されており当時の服飾の一端が垣間見える資料です。またもう一つは、今回写真で載せていないですが、土器の口縁にネコ科の動物を表現したものがあります。チャンカイ文化の図像のモチーフは人の顔のほかに鳥やリャマなどの動物をモチーフとしたものが多く作られており、戦勝首級のような生臭いものはなく、家畜や動物、植物など自然主義的な表現が多いのもこの文化の土器の特徴です。また、収蔵されている資料数が少ないのと発掘資料ではないので、あくまでも推測の域を出ませんが、幾何学文様を用いた土器は白地黒彩ないし白色スリップのみの土器に比べ粘土の粒子が細かく整形も丁寧であるのと、スリップのかけ方が白色スリップの方に粗雑なものが見られることなどから使用者の身分によって使われる土器の質が異なっていたのではないかと考えられます。

図1　チャンカイ文化の地理的位置

以上、明治大学博物館に収蔵されている資料を紹介してきました。チャンカイ文化の土器は素朴な色彩と、自然や人など身近のものを表現する造形手法は一見派手さはありませんが、製作者やそれを使用していた人達の様子が身近に感じられる資料です。

今回はその一部のみの紹介でしたが当館にはその他の時期に属する資料も数は少ないながらも収蔵しています。今後常設展示室の考古部門のコーナー展示で収蔵コレクションの逸品を紹介している明大コレクションで展示する予定ですので、その際は是非当館に足を運んでいただきたいと思います。　(田口　慎)

写真 1　チャンカイ文化の土器 (前列：鉢・コップ・鉢、後列：壺・人面付壺)

写真 2　白色スリップが施された土器 (左：碗・右：皿)

写真 3　人の顔が描かれた土器

明治大学博物館入館者数の動き（2009年1月～6月：延べ人数）

2004年4月以降の総入館者数累計　287,091人

特別展来場者数内訳		開催日数	来館者数
3/16～3/31	新収蔵品展 2009	16日間	747
4/13～5/18	特別展 東アジア・海のシルクロードと“福建” ー陶磁器 茶文化 東西交易 水中考古ー	36日間	4142
6/5～6/25	見いだされた日本ー Le Japon vécuー	21日間	2124

「東アジア・海のシルクロードと“福建”」展内覧会

1月～6月	延べ人数
図書室利用者	1827
講座受講者	1984
黒耀石研究センター利用者数	357

※前号、集計数の一部に誤りがありましたことをお詫び申し上げます。

団体見学の記録　2009年1月～6月

【一般】　世田谷区生涯大学(30名)・警察大学校国際警察センター(28名)・社団法人日本セカンドライフ協会(11名)・法務省法務総合研究所　国際協力部(21名)・太平ツアー(32名)・高輪ミニ会(20名)・彩の国いきがい大学さいたま学園大宮コース 27期校友会(28名)・明治大学工学部電機学科昭和 34年卒業生(30名)・私立大学連盟・17大学広報連絡者会議(34名)・日本農学図書館協議会(10名)・木星会(32名)・銀の鈴史跡めぐり同好会(38名)・さいたま市立浦和南高等学校 PTA(71名)・栃木県立宇都宮南高等学校 PTA(57名)・栃木県立栃木商業高等学校 PTA(40名)

【小・中学校】　東京都千代田区立お茶の水小学校6年生(56名)・東京都新宿区立西早稲田中学校(6名)・埼玉県三郷市立瑞穂中学校(5名)・東京都東村山市立東村山第五中学校(30名)・鹿児島県鹿児島市立鹿児島玉龍中学校(19名)・東京都中野区立北中野中学校(6名)・愛知県蟹江町立蟹江北中学校(10名)・愛知県春日井市立柏原中学校(7名)

【高等学校】　恵泉女学園高等学校(12名)・東京都立一橋高等学校(11名)・明治大学付属中野高等学校(39名)・東邦考古学研究会(20名)・神奈川県横浜桜陽高等学校　3年生(9名)・茨城県茨城高等学校　2年生(50名)・千葉県立幕張総合高等学校　3年生(51名)・千葉県東葉高等学校(37名)・千葉県千葉市立稲毛高等学校(67名)・和洋九段女子高等学校(10名)・成城学園高等学校　3年生(15名)・大宮開成中学・高等学校(86名)

【大学・大学院・専門学校】　明治大学経営学部　3年生(16名)・明治学院大学文学部芸術学科(35名)・早稲田大学文学部アジア史専攻(24名)・明治大学法学部堀田秀吾ゼミ(6名)

図書室から

今回から博物館に併設している図書室に関することを紹介する“図書室から”が始まります。第一弾は、「図書室について」の概要をご紹介します。

明治大学博物館の図書室には主に発掘調査報告書、考古・刑事・商品部門に関する一般図書、各機関・博物館・市町村の刊行物、全国の博物館の図録があり、学内外の多くの方にご利用いただいております。蔵書数は 9万冊余り。蔵書の大半は発掘調査報告書で、多くの研究者に重宝されています。

所蔵されている本は OPAC検索が可能ですが、雑誌に関しては現在MARC化作業中のため検索で表示されない事もありますので、図書室利用の際には OPACで配置場所、請求記号を確認の上ご利用下さい。

貸出は行っておりませんがどなたでも利用できます。(紹介状不要)

静かな知識の宝庫へお気軽に足を運んでみて下さい。

開室：平日 10：00～16：30

＊携帯電話のご使用、飲食はできません。

＊夏季休暇・冬季休暇がありますので、ホームページでご確認下さい。

MUSEUM EYES
2009 Vol.53 ミュージアム・アイズ
明治大学博物館 MUSEUM EYES（ミュージアム・アイズ）第53号
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 TEL03-3296-4448 http://www.meiji.ac.jp/museum/
2009年9月30日発行 ＜印刷＞図書印刷株式会社 ＜第53号製作スタッフ＞田口 博之助 鈴木 久仁 鶴

博物館
友の会から

特別展受付ボランティア体験記

“クォーン”という音がしてエスカレーターが動き出す。そこに加えてトントンとステップを踏む音。これはハズレだ。そこに若やいだ話し声がしても、二人連れには特別展の看板が目に入らぬらしい。ちょっとだけ引っ込めた受付の席から首を伸ばし、日向の亀よろしく世間の動きを窺がう自分の姿自身がおかしい。

さて、受付ってなんだ。自らが「二」の位置にあることは心得ているが、機械ではないことも確かである。受付にいることの喜び、それは事前事後に関わらない“問い”かけに尽きる。寝ている亀にも目覚めるときがくるのだ。接して媚びない話し方を心掛けること！

さてさて、今日もまた来客数を数える時間が来た。

（近藤　庄司）

受付ボランテイアを必要とする特別展は有料の場合です。その作業は切符のもぎりと時間帯別入場者数の把握、無料扱い者の仕分け、切符の購入案内などです。作業中には様々な経験があり、たまたま以前に講演を聞いたことがある先生がお見えの際に積極的な声かけで無事にご案内ができてほっとした例や、本学の先生や他大学からお見えの高名な先生のお顔を存じ上げずに切符の呈示を求めたりした失敗例などがあります。

また、困った例では入場料をとっておいてこれしかないのか他の大学博物館では無料のところもあるのにと嫌みを言われたりしたこともあります。それでも概してお客さんの反応は好意的で気持ちよく受付案内ができているのは何よりと思っています。

（植原　昭八）

明治大学博物館が主催する講演会、見学会などの行事に参加してきましたが、受益ばかりで、手伝い・奉仕は何一つしてきませんでした。しかし、博物館友の会を通じて募集があったのを機に『ガウランド日本考古学の父』、『氷河時代の山をひらき海をわたる―日本列島人類文化のパイオニア期―』、『東アジア・海のシルクロードと“福建”』の3回の春秋博物館特別展の受付係に応募しました。

勤務の時間帯は午前、午後の何れかを3時間30分程度担当し、各特別展で2回程度担当しました。

仕事は、入場券の半券切り、時間毎の入場者数の記録が主です。また、受付は原則2名で行いますが、たまに応募者が足らず、1人のことがしばしばありました。そのため、多くの友の会会員からの参加を期待したいと思います。

受付では多くの来館者の方々との触れあいがあります。たまに見学者の方から質問に遭うこともあります。礼儀正しい方、対応にちょっと困る方など様々な人がいて大変ですが、多くの来館者と触れ合えるのも受付ボランティアの醍醐味だと思います。

（佐藤　公昭）

【明治大学博物館友の会　連絡先】
〒101-8301　東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学博物館　友の会宛
メールアドレス　meihakutomonokai@yahoo.co.jp
※博物館事務室に、友の会の担当者は常駐しておりません。連絡は必ずハガキまたはメールでお願いします。

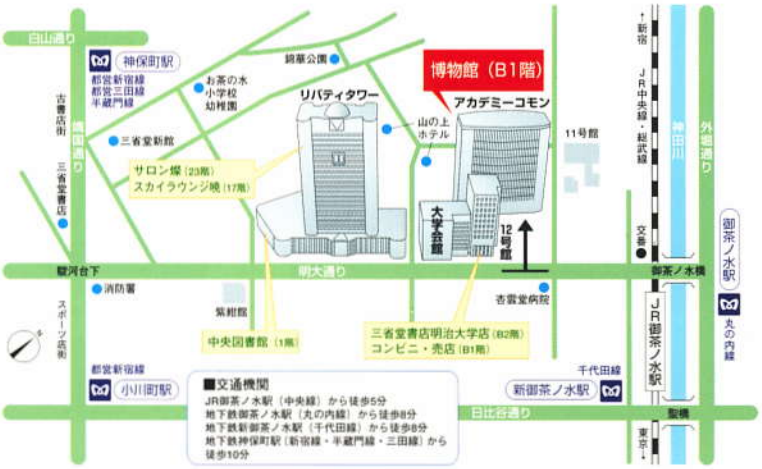
博物館案内

【博物館案内】

◆開館時間
10：00～17：00（入館16：30まで）
◆休館日
夏期休業日（8/10～8/16）
冬期休業日（12/26～1/7）
8月の土・日に臨時休館があります。
※開館時間・休館日には変更の場合があります。
◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

【図書室ご利用案内】

◆開室時間
月～土　10：00～16：30
◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は原則閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



編集後記：今回のミュージアムアイズでは従来の記事に加えて学内、学外問わず広く利用されている博物館図書室の裏側を紹介する新コーナー「図書室から」が始まりました。また、各部門の収蔵資料の逸品を紹介する「収蔵室から」では3部門すべてを掲載し、巻末には博物館活動を陰で支えている友の会の方々による特別展受付体験記が載るなど全ページを通して読み応えある内容になっています。是非お手にとってご一読いただければ幸いです。